

シーボルト入手の植物標本帳 Herbarium Medici Jedoensis にあるスミレの標本

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00050046

山田直樹：シーボルト入手の植物標本帳 *Herbarium Medici Jedoensis* にあるスミレの標本

〒331-0802 埼玉県さいたま市北区本郷町 724

Naoki Yamada : Four specimens of *Viola* included in the plant album “Herbarium Medici Jedoensis” obtained by von Siebold in 1827

Hongo-cho 724, Kita-ku, Saitama 331-0802, Japan

シーボルトが第1回目の来日時(1823-1829)に収集した膨大な植物標本類の多くはオランダ国立植物標本館のライデン大学分館(Nationaal Herbarium Nederland Universiteit Leiden branch)に良好な状態で保存されている。ライデン大学分館は国立植物標本館(Rijksherbarium)として知られていたが、近年他の2標本館と統合され、名称も変更された。

シーボルト植物コレクションは、数多くの基準標本を含む価値の高いコレクションであり、これまでも多くの研究者が調査、研究している(石山1988, 2000; 大場1992, 2003; 大森1982, 1997; 加藤1988, 2003 a; 木村1981; 清水1977; 山口1997, 2003; 山口・加藤1998)。その中にはマルバスミレ *Viola keiskei* Miq. の基準標本が含まれており、日本のスミレ研究には植物分類学的にも植物学史の面からも大変重要な価値があると考えられる。しかしながら、スミレ類の標本や植物画などの資料についてはこれまで十分に解明されていない。日本のスミレの研究をしている筆者は数年前から元熊本大学教授の山口隆男氏からスミレ類に関する多くの標本画像や資料の提供を受け、順次調査を進めている。

国内には江戸期のスミレ類の標本はほとんど残されていないが、シーボルトが収集してライデンに保管されている標本群の中には、日本人の手によって作成された「伊藤圭介標本帖」や標本帖「Herbarium Medici Jedoensis」(以下、山口(2003)が述べている「江戸標本帖」という名称を使用する)などが含まれている。これらの資料中のスミレ類を解析することは、当時の本草学と西洋分類学におけるスミレ類の認識の差異を比較するうえで重要と考えられる。

今回の報文では、「江戸標本帖」に含まれる4点のスミレ類の標本について、山口氏からご提供いただいた写真を基に、当時と現代の分類学的認識についての比較検討を行った結果を報告する。

「江戸標本帖」を最初に研究したのは国立植物標本館の第2代目館長で多くの日本産植物を記載したミケール(Friedrich Anton Wilhelm Miquel, 1811-1871)で、多くの標本を植物分類学的な見地から調べて同定し、その結果を「Herbarium medici Jedoensis, totam probabiliter in ins. Jeso et Nippon boreali collectum. Voluminibus II」と表記し、標本帖に納められている多くの標本を同定し、このうち4種類を新種として命名した(Miquel 1867)。

この標本帖には表紙の裏側にシーボルトの筆跡で「Herbarium Japonicum Edo, uit Nov. 1827」と書かれた紙片が貼ってあるのみで、氏名のようなものはなく誰から送られてきたものなのか不明ではあるが、江戸参府で知り合った未知の日本人から1827年に出島のシーボルトに送られて来たものと推定される(加藤1988; 山口1997)。

この標本帖はこれまで多くの日本の研究者が調査している。最初の研究は小泉(1936)によるもので、「江戸薬園にありし腊葉帖二冊」として4点の基準標本について報告した。その後、清水(1977)は、標本帖について原寛がHerbarium Medici Jedoensisと副題をつけたことを記したうえで、標本帖のサイズと標本点数(第一冊は1~160番、第二冊には1~110番の計270点)および小泉(1936)が報告した基準標本についての標準和名と正名に関する報告を行なった。続いて包括的な検討を行った

加藤 (1988) は、第一冊目に2枚の紙片が挟まっているのを見つけ、1枚は原が「Herbarium Medici Jedoensis」と副題をつけたもの、別の1枚はミケールがこの標本帖を調べている旨を記したものであることを述べた。また4点の基準標本が含まれるページの写真を掲載して、手書きの学名や属名が付記されていること、基準標本にはミケールが命名した学名と「TYPE!」と記した赤色のラベルが貼ってあること、一部の標本が切り取られていることなどとともに、それらの標本番号を記している。

さらに加藤 (2003 b) は、標本帖に貼付されている全ての植物の同定を行い、一覧表を作成した。その際に切り取られた標本数は合計15点で、オランダ国立植物標本館の一般標本庫内にいくつか収容されていることを明らかにした。山口 (1997, 2003) は、これまでに解明された事実に加え、この標本帖の全体に亘る詳しい解説を6枚の写真添えて報告している。山口 (1997, 2003) は、標本帖は桂川甫賢または宇田川榕菴から貰った可能性があると述べた。しかし、彼ら自身が作成したものでなく、誰かが作成したものをシーボルトに贈ったもの、としている。それぞれの標本には通し番号が与えられている。記入されている学名はシーボルト自身が書いた。また、シーボルトは番号順に学名リストも作成している (Fig. 1)。これほどまでにシーボルトが熱心に調べた標本帖は他には無く、彼が「江戸標本帖」に特別に興味を抱いていたことが推測される。なお、シーボルトは標本帖のリストにおいて、タイトルを *Plantae Jezoensis ab archiatro anno 1826 in urbo Jedo communicatae* と書いているが (Fig. 1)、山口によると *Jezoensis* は *Jedoensis* の書き誤りか勘違いであるという。その根拠として、山口 (1997) は、シーボルトがオランダ内務省に送った公開書簡に付属している文書類の中にシーボルトが所有していた植物標本目録があり、それを掲載している。その目録の一つ B-b に 3. Een origineel Japanisch herbarium in 2 boek delen in 4° door een geneesheer te Jedo bij eengebragt. (シーボルトが江戸の医師から貰った標本帖を意味する) がリストされている。この標本帖とは「江戸標本帖」のことであり、山口は、標本帖に貼付されている植物は蝦夷産のものである印象を受けないこと、シーボルトはこのリストでは蝦夷産というようなことは述べていないこと、もし蝦夷のものであればシーボルトは、必ず自慢げに蝦夷産のものと書き入れるであろうと判断した。

この標本帖に含まれるスミレ類の標本は4点で、いずれも第1分冊に含まれており、第2分冊には無かった。これら4点の標本は、加藤 (2003 b) の

20
Plantae Jezoensis ab archiatro

anno 1826 in urbo Jedo communicatae

1. <i>Adonis sibirica</i>	16	<i>Nardus japonica</i> S.M.
2. <i>Eranthis</i> plant.	17	<i>Nardus</i>
3. <i>Erigeron japonicus</i>	18	<i>Trifolium</i>
4. <i>Narcissus tazetta</i>	19	<i>Epidendrum</i>
5. <i>Corydalis ambigua</i>	20	<i>Laminaria</i> <i>basilium</i> S.M.
6. <i>Viola japonica</i> Thunb.	21	<i>Thapsia</i> <i>diversa</i> L.
7. <i>Isopogon japonicus</i> Sieb.	22	pl. incompl.
8. <i>Viola</i>	23	pl. excusata.
9. <i>Psychotria terminalis</i> S.M.	24	pl. <i>china</i> ?
10. <i>Eranthis</i> plant.	25	pl. <i>china</i>
11. <i>Eranthis</i>	26	<i>Gentiana</i> <i>Thunbergii</i> Fr.
12. <i>Candollea persica</i> <i>pedunculata</i>	27	<i>Polandilla</i>
13. <i>Asperula</i> <i>Sibirica</i>	28	<i>Cypripedium</i>
14. <i>Anemone</i> <i>parviflora</i> Thunb.	29	pl. <i>excusata</i>
15. <i>Crocus</i> <i>Spadiceus</i> L.	30	<i>Calla</i>
16. <i>Crocus</i>	31	<i>Anemone</i> <i>Belleidistrum</i>
17. <i>Corydalis</i> <i>incisa</i> D.	32	<i>Viola</i> <i>jezoensis</i> Thunb.
18. <i>Asperula</i> <i>Sibirica</i> <i>capitata</i>	33	<i>Asperula</i>
19. <i>Viola</i> <i>Tatjanae</i>	34	<i>Asperula</i> <i>colorata</i> L.
20. <i>Gram</i>	35	<i>Crocus</i>
21. <i>Myosotis</i>	36	<i>Viola</i> <i>canina</i>
22. <i>Fragaria</i> <i>indica</i>	37	<i>Polypodium</i> <i>Japonicum</i> Thunb.
23. <i>Corydalis</i> <i>Jezoensis</i> Sieb.	38	<i>Asperula</i> <i>jezoensis</i> Thunb.
24. <i>Viola</i> <i>arvensis</i> L.	39	pl. <i>excusata</i>
25. pl. <i>excusata</i>	40	<i>Asperula</i> <i>jezoensis</i> Thunb.

Fig. 1. The first page of the 5-page list of the plant album written by von Siebold himself. Von Siebold erroneously spelled *Jedoensis* as *Jezoensis* in the title. Three *Viola* species are listed, nos. 19, 24 and 46 in this page.

一覧表に掲載されているが、同定の根拠となるような記述は省略されている。

今回の調査では、これら4点に関する検討資料は山口氏からご提供を受けた標本写真のみであり、原標本を直接に検してはいない。この標本帖では葉や花を美しく示すためと思われるが、標本には加工が加えられている。根茎部は切除し、葉、花あるいは枝を一旦切り離してから台紙に貼り付けている。そのために、同定の根拠となる情報が一部失われているので、近似種との識別には十分に注意して検討を行った。その結果、4点は以下に示す種であったこと、当時としてはシーボルトは比較的適切な同定をしていたことが判明した。

(1) 第十九番: *Viola mandshurica* W. Becker (1917) スミレ (Fig. 2 A)

この腊葉標本には根は無く、葉と花のみである。花卉の状態は悪く、花数から推定すると多量に多いはずの葉数も2枚のみである。おそらく1株のごく一部分のみから作成されたと思われる。写真から標本の葉は長楕円状披針形(へら形)で、縁の鋸歯が目立たないこと、葉身の長さ4-5 cmであることから開花初期の葉と思われる。シーボルトは *Viola Patrinii* と標本帖に付記しており、彼のリストにも



Fig. 2. Four specimens of *Viola* in the plant album donated to von Siebold from a physician in Edo.

- A : *V. mandshurica*. Von Siebold identified the specimen of 十九 as *Viola Patrinii*.
 B : *V. eizanensis*. Von Siebold identified the specimen of 二十四 as *Viola dissecta*.
 C : *V. grypceras*. Von Siebold identified the specimen of 四十六 as *Viola canina*.
 D : *V. hondoensis*. Von Siebold identified the specimen of 百五十三 as *Viola*.

No. 19 *Viola Patrinii* と記している。

日本での近似種はシロスミレ、アリアケスミレ、ノジスミレおよびヒメスミレで、シロスミレは中部地方以北の高原湿地性であるが、他の3種類はスミレと同じように人に普通に生育している。これらの近似種との識別形質のうち、花径は標本の状態が悪いこと、花色(淡茶色に変色)、花卉の毛の有無および葉の毛の有無などは写真では検討不可能のため、葉の形状、距の形状と長さのみの検討で同定せざるを得なかった。

アリアケスミレは葉柄の翼は葉の基部にあるがスミレほど目立たない。開花初期葉の基部はほぼ切形である傾向が強い。距はやや扁平で長さ3-5 mm(標本点数 N=52, 花数 n=94, mean=4.1±0.4(標準偏差) mm, 以下同様。近似種の距の測定値は、筆者の所蔵標本および諸機関から借用した標本(スキャナーで取り込み済みの標本画像を含む)をスキャナーで取り込み拡大して計測した。太さ2.5-3 mm(mean=2.7±0.4 mm)で、スミレの長さ4-7 mm(N=39, n=84, mean=5.6±0.6 mm), 太さ2-4 mm(mean=2.8±0.5 mm)に比べて短い。

ノジスミレの距は扁平で細いのが特徴で長さ6-7 mm(N=4, n=4, mean=6.4±0.9 mm), 太さ2 mm(mean=2.0±0.3 mm)。葉は長卵状披針形から長披針形でスミレやアリアケスミレのようにへら形では無い。葉柄の翼も殆ど無い。

ヒメスミレの葉は三角状披針形で、へら形では無い。花時には葉柄の翼は殆ど無い。距は長さ3-5 mm(N=5, n=12, mean=4.2±0.5 mm) 太さ2-3 mm(mean=2.1±0.2 mm)でスミレよりも短い。

当該標本の葉はへら形で、基部は楔形であり、葉柄の翼が明確に認められる。標本にある5個の花は状態が非常に悪くて計測可能なものに限って測定した結果、距の長さ5-6 mm(N=1, n=3, mean=5.3±0.5 mm), 太さ2-3 mm(N=1, n=4, mean=2.5±0.5 mm)であった。当該標本の各部位の形態と近似種の相当する各部位の形態を比較した結果、当該標本はスミレと考えるのが最も妥当である。なお加藤のリスト(2003 b)には、当該標本はシロバナスミレとして報告されているが、この和名はシロスミレ *V. patrinii* DC. の別名(前川 1954)である。

スミレは、Becker(1917)が *Viola mandshurica* として別種として記載するまでは *V. patrinii* の変種として *V. patrinii* var. *chinensis* Gingin(1824)あるいは *V. patrinii* var. *macrantha* Maxim.(1845)とされていた。従って、シーボルトの *Viola patrinii* とした同定は当時としては概ね妥当なことと言える。

(2) 第二十四番: *Viola eizanensis* (Makino) Ma-

kino(1917) エイザンスミレ (Fig. 2 B)

番号の上に、*Viola dissecta* Ledeb. *palmata* とシーボルトの書入れがある。スミレと同じように、根茎部は切除されて葉と花のみが貼ってある。彼のリストには、No. 24 *Viola dissecta* Ledeb.とある。葉は大きな切れ込みを持つことが特徴で、このような形質を持つ日本産スミレにはエイザンスミレとヒゴスミレがある。

エイザンスミレの葉は基部で3全裂するが、ヒゴスミレ *V. chaerophylloides* (Regel) W. Becker var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino(1905)の葉は基部が5全裂すること、花時の葉の裂片はヒゴスミレに比べてエイザンスミレの方が巾広いことなどが両種の識別形質である。写真の標本には3枚の葉があるが、最も特徴を表している中央の葉は、基部で3全裂していることおよび各裂片の巾が広いことから、エイザンスミレと同定した。加藤のリスト(2003 b)にもエイザンスミレとして報告されているので、本調査の結果はこれを再確認したことになる。

Viola dissecta は、日本には自生しない種類である。しかしエイザンスミレやヒゴスミレなど複葉性のスミレ類の分類学的な位置づけはこれまでに諸説(Makino 1912; 前川 1954; 伊藤 1962; 前川・橋本 1963; 大井・北川 1983)あり、エイザンスミレについては1910年代頃までは *V. pinnata* var. *dissecta* f. *triphylla* Miq.(1866)あるいは *V. dissecta* var. *eizanensis* Makino(1912)のように *V. pinnata* L. や *V. dissecta* の変種として扱われていた。従ってシーボルトが本種を *Viola dissecta* と同定したのは当時としては概ね妥当なことと言える。

(3) 第四十六番: *Viola grypoceras* A. Gray(1856) タチツボスミレ (Fig. 2 C)

茎の上部のみが貼ってあり、番号の横に *Viola canina* L. とシーボルトの書入れがある。リストではNo. 46 *Viola canina* と記され、L. は省略されている。

ニオイタチツボスミレ *V. obtusa* (Makino) Makino 及びオオタチツボスミレ *V. kusanoana* Makino はタチツボスミレの近似種として混同されやすい。しかしニオイタチツボスミレの地上茎は花時には伸長しておらず、花は殆ど根生状で一見無茎種のように見える。花時の葉形はタチツボスミレのような心臓形ではなく卵形で先端は尖らない。一方オオタチツボスミレは、花時の茎は直立ぎみに斜上し、花は殆どが茎からの腋生状となるものが多い。これは当該写真の標本形質と同様である。しかしオオタチツボスミレの葉形は円心形で、葉の基部は深い心臓形で両片が重なり合う状態のものが多いこと、托

葉は広卵状披針形で櫛の歯状の切れ込みは浅い。

タチツボスミレは花時に茎がよく伸びている場合と、ほとんど伸びていない場合があり、花は根生と腋生の両方の状態が見られる。当該標本は地上茎が伸びていて腋生花があり、葉形は心臟形で上部の葉ほど三角状心臟形、葉縁の鋸歯は下記の近似種に比べて粗いこと、托葉は披針形で深い櫛の歯状の切れ込みがあることからタチツボスミレと同定した。加藤のリスト (2003 b) でもタチツボスミレと記してあるので、本調査の結果はこれを再確認したことになる。

タチツボスミレは、S. W. Williams and J. Morrow が横浜で採集した標本に基づいて Gray (1856) が *Viola grypceras* として記載した種であるが、これ以前には *V. palustris* L. (Thunberg. 1784; Nakai 1925) および *V. canina* var. *ε? japonica* Gingin (1824) の学名が記録されている。また当時ヨーロッパに自生するタチツボスミレ類には *V. canina* (1753), *V. montana* L. (1753) と *V. sylvestris* Lam. (1779) が記載されている。このうち *V. canina* および *V. sylvestris* は、花は淡紫色、側弁は有毛であるが、花時に茎が目立たないものから伸びたものがあり、葉は卵状心臟形、托葉は披針形で櫛の歯状の切れ込みもタチツボスミレと同じくらいであり、側弁の毛の有無を除けばタチツボスミレとよく似ている。従ってシーボルトが *Viola canina* としたのは当時としては適切な同定を行っていたといえる。

(4) 第百五十三番: *Viola hondoensis* W. Becker et H. Boissieu (1908) アオイスミレ (Fig. 2 D)

2枚の葉のみがマウントされた標本で、番号の右横にシーボルトは *Viola* と書き入れている。

標本の葉は、円心形から円形、先端は円形か鈍頭、縁の鋸歯は平低で、葉の基部は深い心臟形をなし、葉身の長さ巾とも 4-5 cm の開花直後の葉と思われる。このような形態を持つ種群にはアオイスミレとエゾアオイスミレの2種あるが、後者の葉は細長く先端が尖った卵形である点が異なることから、当該標本をアオイスミレ *V. hondoensis* と同定した。加藤 (2003 b) もアオイスミレとして報告している。本調査ではこれを再確認したことになる。

シーボルトは標本帖には *Viola* と記入したが、リストでは No. 153 *Hydrocotyle? Viola* としている。葉柄基部の托葉すらない葉だけの標本に迷いがあったのは致し方ないことであろう。

なお、本報告では学名は Akiyama et al. (1999) に従った。

謝 辞

本稿の執筆に際して、貴重な資料の提供や全般に亘ってご教示を戴いた山口隆男先生と人間環境大学の藤井伸二先生、さらに2枚のラベルに関する資料についてご教示戴いた元信州大学理学部教授の清水建美先生と獨協大学教授の加藤偉重先生、第十九番の標本検討において貴重な助言を戴いた元国立科学博物館つくば実験植物園長の橋本 保先生、スミレ及びアリアケスミレの標本や標本画像を提供戴いたスミレ愛好会の福井敏勝、牧 嘉裕両氏、豊橋市自然史博物館の藤原直子学芸員、岐阜県博物館の千藤克彦学芸員はじめ多くの方々のご協力に深謝いたします。

引用文献

- Akiyama, S., Ohba, H. and Tabuchi, S. 1999. Violaceae. Iwatsuki, K., Boufford, D. E. and Ohba, H. (eds.). Flora of Japan. IIc, pp. 161-190. Kodansha, Tokyo.
- Becker, W. 1908. Beiträge zur Violenflora Asiens. Bull. Herb. Boiss. ser. 2, 8: 739.
- Becker, W. 1917. Zur Klärung der Patrinii D.C. und ähnlicher Arten. Engl. Bot. Jahrb. Syst. 54, Beibl. 120: 179.
- De Candolle, A.P. 1824. Prodrômus systematis naturalis regni vegetabilis I: 293, 298. Treuttel et Würtz, Paris.
- Gray, A. 1856. Account bot. specim. "List of dried plants collected in Japan, by S. Wells Williams Esq., and James Morrow". Narrat. Exped. China and Japan. 2, p. 308. Washington.
- 石山禎一. 1988. ライデンさく葉館の歴史とシーボルト・コレクション—特にシーボルトの自筆書簡「1864年ヴェルツブルグからの公開状」を中心に1—。箭内健次 (編). 鎖国日本と国際交流 (下巻), pp. 254-282. 吉川弘文館, 東京.
- 石山禎一. 2000. シーボルト—日本の植物に賭けた生涯—. 281 pp. 里文出版, 東京.
- 伊藤栄子. 1962. 日本産ナンザンスミレ群の変異についての観察. 国立科学博物館研究報告. 6: 194-203.
- 加藤偉重. 1988. ライデン大学にある日本人が初めて採集した植物基準標本について. 獨協大学教養諸学研究 (23): 192-203.
- 加藤偉重. 2003 a. 牧野標本館所蔵のシーボルトコレクション. 288 pp. 思文閣出版, 京都.
- 加藤偉重. 2003 b. 切り取られた標本—オランダ国立植物館の『平井海蔵標本帖』と『Herbarium

- Jedoensis Medici』. 石山禎一他 (編). 新・シーボルト研究 I 自然科学・医学篇, pp. 51-98. 八坂書房, 東京.
- 木村陽二郎. 1981. シーボルトと日本の植物. 235 pp. 恒和出版, 東京.
- 小泉源一. 1936. 日本植物の研究. 植物分類・地理 **5**: 1-26.
- Lamarck, J. B. 1779. Flore Française. II, p. 680. de l'Imprimerie Royale, Paris.
- Linnaeus, C. 1753. Species Plantarum, II, p. 935. 植物文献刊行会復刻版, 井上書店, 東京. 1935.
- 前川文夫. 1954. スミレ科. 原寛 (著). 日本種子植物集覧 III, pp.194-226. 岩波書店, 東京.
- 前川文夫・橋本保. 1963. 日本のスミレ. 8 pp. 自費出版, 東京.
- Makino, T. 1905. Observations on the Flora of Japan. Bot. Mag. Tokyo **19**: 87.
- Makino, T. 1912. Observations on the Flora of Japan. Bot. Mag. Tokyo **36**: 155.
- Maximowicz, C. J. 1859. Primitiae Florae Amurensis. Mèm. Acad. Imp. Sci. St. Petersburg **9**: 48-49.
- Miquel, F. A. W. 1866. Prolusio Florae Japonicae, pars secunda. Violaceae. Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. **2**: 152-155.
- Miquel, F. A. W. 1867. Prolusio Florae Japonicae, pars sexta. Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. **3**: 200-206.
- Nakai, T. 1925. Notues sur les Violettes du Japon. Bull. Soc. Bot. France **57**: 180-195.
- 大場秀章. 1992. シーボルトの『日本植物誌』. 日本植物誌—シーボルト [フローラ・ヤポニカ]— (博物図譜ライブラリー 6), pp.137-150. 八坂書房, 東京.
- 大場秀章 (編). 2003. シーボルトの21世紀 (東京大学コレクション XVI). 231 pp. 東京大学総合研究博物館, 東京.
- 大井次三郎・北川政夫. 1983. スミレ科. 新日本植物誌顕花篇 (改訂版), pp. 1020-1044. 至文堂, 東京.
- 大森 實. 1982. シーボルト研究の現状と新資料について. シーボルト研究 **1**: 1-31.
- 大森 實. 1997. 知られざるシーボルト—日本植物標本をめぐって—. 261 pp. 光風社出版, 東京.
- 清水建美. 1977. ヨーロッパで見た日本植物研究史 II. 長野県植物研究会誌 (10): 130-137.
- Thunberg, C. P. 1784. Flora iaponica. p. 326. 植物文献刊行会復刻版, 井上書店, 東京. 1935.
- 山口隆男. 1997. シーボルトと日本の植物学. CALANUS 特別号 I, pp. 73-76, 87-89, 273-274. 熊本大学理学部附属合津臨海実験所, 熊本県松島町.
- 山口隆男・加藤偉重. 1998. シーボルトと日本の植物学 (その2). CALANUS 特別号 II, pp. 21-51, 52-435, 441-446. 熊本大学理学部附属合津臨海実験所, 熊本県松島町.
- 山口隆男. 2003. シーボルト並びに関連した人々が収集した植物標本類. CALANUS 特別号 V, p. 167. 熊本大学沿岸域環境科学教育センター合津マリンステーション, 熊本県松島町.

(Received December 12, 2005; accepted August 22, 2006)

Summary

The Leiden University branch of the National Herbarium of the Netherlands holds various kinds of the botanical specimens assembled by Philipp Franz von Siebold (1796-1866) in Japan. The content of his collection was reported by Kato (1988) and Yamaguchi (1997, 2003). I was much interested in a plant album donated by an unknown physician to von Siebold in 1827. The album consists of two volumes and in the first volume 160 and in the second 110 plants are attached. I examined the photographs of them given by Dr. T. Yamaguchi and confirmed that following four *Viola* species are included in the first volume: No. 19, *Viola mandshurica* W. Becker (identified by von Siebold as *Viola patrinii*), No. 24, *Viola eizanensis* (Makino) Makino (von Siebold identified it as *Viola dissecta*), No. 46, *Viola grypoceras* A. Gray (von Siebold identified this specimen as *Viola canina*) and finally No. 153, *Viola hondoensis* W. Becker et H. Boissieu (von Siebold identified it only as *Viola*).